

第1日曜日
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～
その他の日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会会報

2021 (令和3年) 9. 12

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

祈祷会
第2日曜日 礼拝後
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

「死を永久に滅ぼしてください」

牧師 松谷 祐二

イザヤ書 第二十五章一～九節

主よ、あなたはわたしの神。わたしはあなたをあげ、御名に感謝をささげます。あなたは驚くべき計画を成就された。遠い昔からの揺るぎない真実をもつて。

あなたは都を石塚とし、城壁のある町を瓦礫の山とし、異邦人の館を都から取り去られた。永久に都が建て直されることはないであろう。それゆえ、強い民もあなたを敬い、暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。

まことに、あなたは弱い者の皆、苦難に遭う貧しい者の皆、豪雨を逃れる避け所、暑さを避ける陰となられる。暴虐な者の勢いは壁をたたく豪雨、乾ききった地の暑さのようだ。あなたは雲の陰が暑さを和らげるように、異邦人の騒ぎを鎮め、暴虐な者たちの歌声を低くされる。

万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜き酒。

主はこの山で、すべての民の顔を包んでいた布とすべての国を覆っていた布を滅ぼし、死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、御自分の民の恥を、地上からぬぐい去ってください。これは主が語られたことである。

その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

(新共同訳聖書)

「イザヤ書」は、神から預言者に告げられた言葉を記した書物ですが、この箇所では、預言者が

神の言葉を受け止めつつ、神に応答して讃歌をささげています。「主よ、あなたはわたしの神。わたしはあなたをあげ、御名に感謝をささげます」。それは、神が「驚くべき計画を成就された」から、人の心に浮かびもしなかったような救いを、神が、はるか昔から計画され、準備してこられ、ついに実現してくださったからだ、と言います。

私たちの世界、コロナに悩まされ続けるわたしたちの世界を覆っている「布」を滅ぼし、「すべての顔から涙をぬぐい」ってください。ことです。「あなたは驚くべき計画を成就された」と、預言者は神をほめたたえます。歴史上、暴虐なアッシリアやバビロニアがついに打倒される出来事なら、たしかに実現しました。しかし一体、「死を永久に滅ぼしてください」というようなことが、歴史上起こったことがあるでしょうか。わたしたちは今なお、「死」を見続けているのではないのでしょうか。

その「救い」は、わたしたちを侵略し、虐げてきた、異邦人である敵の都が滅ぼされた、というイメージで歌われています。その暴虐な敵は豪雨のように、作物も人も干上がらせる砂漠の熱風のように襲ってきたが、神がこれを鎮圧してくださった、と。

「その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神」。その日には」という言葉は、現在ではなく将来を指し示しています。わたしたちの肉体的な感覚で言えば、神が「死を永久に滅ぼしてください」ほどの徹底的な救いは、いまだ経験したことはなく、あるとしてもなお将来のこと。なお、待ち望むしかないことです。

預言者イザヤが活動した時代（紀元前八世紀）ならば、この「異邦人」と言われる敵国は、古代イスラエル・ユダ両王国にとつてのアッシリアか、あるいはバビロニアのことかもしれません。しかし預言者は、すぐさま別のイメージを使って、神が用意され、実現された救いを歌います。今度は、神が催される大宴会、すべての民、すべての国から人々が招かれる大いなる祝宴のイメージです。なぜ祝うか。「すべての国を覆っていた布」、「すべての国を覆っていた布」を神が滅ぼしてくださったから、すなわち、「死を永久に滅ぼしてくださった」つたから、と言うのです。

しかし預言者は、神の言葉を通して、神のこの、いにしえから遠い将来にわたる救いの計画も、その成就も、今その目で見ているかのように受け取りました。「これは主が語られたことである」からには、その言葉は真実、その成就は確実。信じる者には、神が成し遂げてくださるはずのこと。すでに「成し遂げられた」と確信してもよいこと。今日この日に、「祝って喜び躍る」のがふさわしいことなのです。

預言者の言う、神が成就された「驚くべき計画」、神の救いのご計画というのは、単にあれやこれやの暴虐な国が打ち倒される、というだけではなく、もつと根本的な解決、決着をもたらすものだということがうかがえます。それは「死」というもの、そのものを追放し、永久に滅ぼしてくださること、なのです。

預言者イザヤからおよそ七百年。この地上に神がおいでになりました。神の子イエス・キリストが。預言者が歌い上げた神の救いの計画の、その完成に向かって、一気にギアが入られました。神の子イエスの、あの十字架の死、そして復活。神が「死を永久に滅ぼしてください」道が、ついに開かれました。神にとつての御自分の民のためにも、すべての民、すべての国のためにも。

アッシリアやバビロニアに蹂躪されてイスラエルやユダの人々が殺されたことが、神にとつての「御自分の民」の受けた「恥」であるならば、神は死そのものを滅ぼすことによつて、その「恥」をぬぐい去ってください。しかし同時にそれは、神が、ひとりイスラエルやユダの人々のみならず、その敵であった国々の人々も含め、「すべての顔から涙をぬぐい」ってください。悲惨な戦争、内戦、難民問題の止まない現代のわた

ですから、信じるキリスト者は、教会は、昔の預言者のように、歌うのです。「見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。」

神様から与えられたこの時

佐藤 マリエ

身も心も傷ついて役員を辞して以来、八年ぶりに戻り、役員を担うことになりました。

振り返ってみると、今までに経験したことの無い体験に遭遇、身も心も自分でコントロールできないような状態に陥りました。その後数年、度々フラッシュバックに見舞われ、抜け出す方法として、本来私にとっては考えられないことですが、当時は転会ということも頭をかすめたこともありました。

信仰の先達であった母と叔母を天国に送ってまだ日も浅かったこともあって、相談相手が見当たらず、一人自分の殻に閉じこもる日々で、牧師先生に心を開いてご相談することすら出来ませんでした。そんな状態の中、一人で苦しみもがいていたように思っていたのですが、マーガレット・パウーズの詩「フットプリンス(あしあと)」。

『ある夜、私は夢を見た
私は主とともになぎさを歩いていた

～
一つはわたしのあしあと、もう一つは
主のあしあとであった。

～
どんな時にも主は私と共にあって歩んでくれる。特に悲しみや苦しみの中にある時、主は見捨てることなく、共にすべてを背負って歩んでくれると……。

私にもこの詩のようなことがおこっており、神様が私に寄り添い、励まし、共に歩んでくれていたことを思い知らされました。

神様は長いときをかけて、私の心をいやし、根気強く待って、立ち直らせてくださり、今またここに立たせてくださったのだと、心から感謝しています。

コロナ禍の中で、役員の留年や選挙方法の変更があったこの時ではありませんが、こんな私を用いていただけることに感謝しております。最後まで担えるのか若干の不安はありますが、与えられたこの時を大事にして。肩肘はらず、わたしなりに努めてまいると思います。お支えくださいますようお願いいたします。

報 告

* 東京都では緊急事態宣言が発出されていますが、礼拝堂での教会学校と主日礼拝は継続しております。各自の判断で、無理なく出席が可能な方はお集まりください。感染対策には十分ご配慮くださり、礼拝後の歓談も短時間とし、ソーシャルディスタンスに気を配っていただきますようお願いいたします。

* 教会員の森民代姉(元南部坂幼稚園園長)が七月三十一日(土)深夜、逝去されました。八十九歳でした。八月四日(水)午後一時より、当教会礼拝堂にて葬儀が行われました。

* 松谷牧師は、八月九日(月)～二十一日(日)まで夏季休暇でした。八月十五日(日)の主日礼拝は、大司教次郎役員の奨励によって守りました。

* 教会員の前田聡子さんが、高田孝幸さんと入籍されました。おめでとうございませう。

《各部報告》

成人会

日時 七月十八日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 四名
開会祈祷 菊池才知子姉
内容

◆ 士師記 三章七節～五章

栄と豊穡を標榜して卑猥な礼拝儀式を行うバアルとアシエラに仕えた。怒に燃えた主はイスラエルを異民族の手に売り渡したため、イスラエル人は後、主に助けを求めたので、主は一人の救助者オトニエルを立て、彼は士師としてイスラエルを裁いた。オトニエルの死後、イスラエルの人々は何度も主を忘れ悪行に走った。その都度主は異民族を強くしてイスラエルを罰した。救いを求める人々に応じて救助者エフドを、次に女預言者デボラとアピノアムの子バラクを遣わしてイスラエルを救った。デボラとバラクは主の御業を賛美する歌を歌った。

◆ 次回九月十九日六～九章

司会は佐藤忠昭兄
閉会祈祷 黙祷

婦人会

日時 七月二十五日 主日礼拝後

出席者 六名

聖書研究 サムエル記下十一～十二章

アンモン人との戦いは続き、ダビデは全軍を前線に送り出した。或る日ダビデは、ウリヤの妻バト・シエバを見初め、関係を持った。ウリヤを亡き者にするため、將軍ヨアブに命じてウリヤを戦死させた。ダビデはバト・シエバを自分の妻の一人としたが、主の御心に敵わなかった。

主は預言者ナタンをダビデのもとに送り、ダビデがウリヤにした事の報いを受けると主の叱責を伝えさせた。次に生まれたソロモンと名付けられた子は主に愛された。

その他 森民代姉の消息が伝えられた。

日時 八月二十二日 主日礼拝後
場所 出席者・開会祈祷 前回に同じ
聖書研究 サムエル記下十三～十四章

ダビデ王の息子アムノンは異母兄弟アブサロムの妹タマルに懸想して彼女を凌辱する。アブサロムはアムノンを憎み、復讐を遂げ、母の出身部族ゲシュルに逃亡した。従兄弟のヨアブは、ダビデ王とアブサロムの和解工作を計る。王は、アブサロムをエルサレムに連れ戻させたが、アブサロムに謁見を許さなかった。二年後アブサロムは、ダビデ王との最終的和解を果たした。(主が良しとされなかったウリヤに対するダビデ王の行為に関連した王家の問題に言及)

次回九月二十六日 「サムエル記 下」十五章～十六章十四節
会堂清掃の件を協議
大司教の個人負担を軽減する方法を検討